

# アウグスティヌスの悪に関する考え

富 貴 島 明

---

## —《論文要旨》—

---

アウグスティヌスは、自己の罪深さに悩み、悪の根元を問い続けた。自己の内面の最も深いところまでほりさげ、神の愛・恵みの大きさを賛美し、人間の罪深さと無知・愚劣さを告白した。アウグスティヌスが、悪と罪に関して探求した段階を4つに分ける。

第1段階では、マニ教の二原論から、悪の根元を、地、闇、情欲に求めた。

第2段階では、新プラトン主義的キリスト教の考えを受け入れ、神でなく、人間の転倒した意志に、悪の根元をみた。

第3段階では、悪の根元を「罪のかたまり」である人間存在そのものにおき、告白により愛の神により救われることを求めた。

第4段階では、ペラギウス主義者たちとの論争で、人間の悪の認識が深まり、神の絶対性が強調された。

アウグスティヌスは司教として、肉の欲、目の欲、野心という悪に染まっている民衆の現実を直視し、食欲と放逸の罪をおかさず、神に向き直ること、施しをすること、心に富を積むことを、繰り返し説いた。

キーワード：アウグスティヌス、ペラギウス、罪、罰、愛、浪費

---

## はじめに

アウグスティヌスの神学は、現実を見つめ尽くすことから出発した。アウグスティヌスほど、現実の悪に苦しみ、悪の根源の問題に悩んだ者はいなかった。自分の内面の最も深いところまで見つめ、自己の罪深さにふるえること

で、神に救われた。『告白』では、おのれの罪を告白し、そのような罪人でも救いたまう神への感謝と讃辞を告白している。また司教となり、説教をする時も、民衆の現実を見つめ尽くし、民衆の心のひだにまで入りこみ、悪の罪深さ、神の偉大さを説いた。アウグスティヌスがあげる3つの善は、信仰と希望と愛である。3つの悪は、肉欲、高慢、好奇心である。これらの悪をおこなうことが罪である。筆者は、ギリシア時代の浪費の考え、キケロの浪費の考えを研究してきた。古代ローマと中世をつなぐ最後の古代人といわれるアウグスティヌスの悪・罪の考えを明らかにし、次に悪のうち特に浪費・贅沢に焦点をあててアウグスティヌスの神学を考察していく。

本稿では、まず第1節でアウグスティヌスの簡単な自伝を示し、悪に関する考えの段階を4つに分けることを説明する。

第2節で述べられる第1段階は、マニ教の信徒として悪を考えた時代である。

第3節で述べられる第2段階は、新プラトン主義的キリスト教を受け入れた時代である。

第4節で述べられる第3段階は、『告白』で述べられた悪の解釈の時代である。

第5節で述べられる第4段階は、ペラギウス主義派との論争で悪の考えが深まった時代である。

第6節で A. アマンの『アウグスティヌス時代の日常生活』やアウグスティヌスの説教などを参考に、人びとの日常生活に悪としての浪費・贅沢が蔓延し、アウグスティヌス自身がそれらについてどう考えたかをみる。

第7節で、全体のまとめをする。

1

アウグスティヌスは、354年ローマ帝国の属州であった北アフリカのタガステという小さい村で生まれた。父親のパトリキウスは、タガステの市参事会員の貧乏市民であった。母親のモニカは、熱心なキリスト教徒であった。13歳の時に隣町のマグウラにある文法学校に進み、中等教育を受けた。そこでは勉学のかたわら、乱れた快楽主義的生活をしていたという。家計が貧しかったので、父親の友人である資産家のロマニアヌスが学費援助を引き受けてくれることで、アウグスティヌスは、370年の16歳の時、修辞学教師になるためカルタゴにいくことができた。かれは、アフリカのローマといわれる町の美しさに目を奪われた。だが繁栄の影に、享楽と悪徳、放縦と倦怠が渦巻く町でもあった。欲望の沸き立つ大鍋（Sarthagó）のカルタゴ（Carthago）で、アウグスティヌス自身は、愛欲の欲望のままに生き、「神なき荒野」をさまよっていたと告白している（『告白』三・一・1）。19歳の時ケケロの『ホルテンシウス』を読み、「信じられないほど熱烈な心で不死の知恵を求め」始めた（『告白』三・四・8）。肉体的なものより精神的なものに楽しみをみいだした。愛知に目覚めたのである。第2の誕生といえる<sup>(1)</sup>。ホルテンシウ斯的回心ともいう。聖書も読み、372年マニ教に入信した。マニ教の合理的な悪・罪解釈を受け入れたのが、第1段階である。マニ教では、理性的に悪の説明をしていることに注目し、自己の罪に倫理的責任がないことに安心した。勉学の終了後、故郷の町とカルタゴで教師の職に就く。383年にはローマで学校を開き、翌年ミラノ市に修辞学教師として移る。

ミラノで、新プラトン主義の考えを知り、共感し、物質的・二元論を覆すことができ、マニ教から離れていく。西方教会の指導者アンブロシウス（334-397年）と出会い、新たな気持ちでキリスト教にむかうことになる。パウロ

の教えを知り、信仰、希望、愛というパウロの神学的徳をも受け入れていく。386年啓示にうたれ回心する<sup>(2)</sup>。自己の全身心を神に奉獻することを決断し、洗礼を受ける（『告白』八・十二・29）。新プラトン主義の立場からキリスト教の悪・罪の解釈をしたのが、第2段階である。キリスト教プラトン主義をつきすすめ、霊的存在の認識と神秘体験にやすらぎをみいだそうとした。

388年帰国し、友人達と修道士のような生活をする。391年司祭職、395年副司教職、396年司教職に就いた町ヒッポ・レギウスは、カルタゴに次ぐ第2の大きな都市であった。司教は、キリスト教会の首長であるとともに、護民官の地位もしめ、精神的・社会的指導者でもあった。恵まれない地位にある人びとは、圧政と貧困に苦しみ、一般大衆は快楽に浸り、遊興と飲酒、飽食と放蕩、贅沢と不道徳が蔓延していた（『神の国』二・二〇）。かれらに説教し、裁判にかかわり、調停し、神の正しい道を歩ませるのが、司教としての役目であった。悪の認識もすすむ。司教となり、毎土曜日に民衆に説教することで自己をさらに深く見つめ直すことができた。若い頃に入信していたマニ教を批判する書物を書くことで、自己の内面をさらに深めた。神の前で人間を問い詰めていくと、人間のもつ罪の現実が浮かびあがってくる。全能の神の前で、罪のかたまりであるアウグスティヌスが自己を見つめ直したのが、397年から書き始め400年に書き終わった『告白』である。パウロの教えにもとづいた罪の解釈が書かれている。これが第3段階。もはや人間善性を信じたり、意志決定の自由を唱えることはない。理性による救い、照明（*illuminatio*）による神の認識、魂の上昇による神への帰還では不十分とした。すべてのものは神がつくられたものであるから、善である。絶対的善である神にそむいて、情欲という低いところへむかう意志、内なる自己を投げ捨て、外にふくれあがっていく意志が悪である。神に向かわない、転倒した意志こそ、悪である。

412年からペラギウス論争が始まり、悪の解釈がすすむ。ペラギウスは、

アウグスティヌスを批判した。人間の意志の自由を認めないことは、人間の主体性を否定してしまう、と批判し、アウグスティヌスがそれにこたえる形で論争が始まる。412 年からは、ペラギウスの弟子であるユリアヌスたちとの論争が、430 年のアウグスティヌスの死まで続く。これが第 4 段階である。

## 2

第 1 段階の、マニ教の悪・罪の解釈をみてみよう。

マニ教の創始者マニは、216 年ペルシアに生まれた。啓示を受け、24 歳の時伝道をはじめ、王の保護を受け広まった。しかし 276 年殉教の死をとげた。彼の死後、彼の教えは東西に流布し、ローマ帝国にも広まった。アウグスティヌスの時代、異端であるとして禁止されたが、アフリカには多くの信者がいた。

マニ教は二元論を説く。光と闇の対立する実体・本性が存在する。善は光に属し、悪は闇に属する。善は、生命や魂、霊的・精神的なものである。悪は、死や物的・肉体的なものである。光の国の下に相接する形で闇の国があり、闇の国は光の国のなかに、あたかも楔を打ち込むように突き進んでいく。対立する光と闇が、戦い、混合することでこの世ができた（『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』二一・23）。世界のうちにある光の部分を救い出し、悪から開放させることが、マニ教の根本教理になる。神は、悪の創造者でなくなったが、無限な存在でもなくなった。悪に限定され、絶対的善の存在でなくなったのである。

人間も神によりつくられたのではない。光の部分である魂をとらえておくために、闇の君によりつくられた。人間は、光と闇、善と悪の 2 つの要素をもつ。悪の原理に強制されて、人間の自由意志によらず、必然的に悪をおこなってしまう。このような人間の光の部分である神的要素を自覚し、それを

闇の部分である肉体から解放するところに、救済の基本がある。光の開放に専念するのが、聖者ないし選ばれた者とよばれる聖職者である（『フォルトゥナトゥス駁論』三）。厳しい戒律を守り、正常な禁欲生活をおくる。聴聞者（聖職者）とよばれる俗人（一般信者）は、聖職者に奉仕することで、救いに与ることができる。

マニ教徒は、すべての物質的なものは闇の王国に属すると考える。神の子キリストの肉体の実在性を認めない。神が人の子イエスとなって肉体をもった段階で、神は限定的となるので、十字架の死は、幻想となる。

アウグスティヌスは、マニ教こそ正しいキリスト教と思い入信した。マニ教の、天文学、天地創造など合理的で科学的知識に期待した。マニ教から9年間も離れなかったのは、マニ教が、罪の原因を自己のうちに置かないで、自己の外の闇の世界に置いたことに、やすらぎと安心を感じたからである。悪は、自己の意志でおこなうのではなく、肉体という闇の要素が強制的におこなわせるのである（『フォルトゥナトゥス駁論』二一）。自己の罪深さに悩んでいたアウグスティヌスにとり、自己に罪の責任がないという教えは、喜びをもち受け入れられた。罪を犯しても、聖職者への奉仕をおこなうだけで、救済されることに、心を癒された。

## ま と め

善と悪の対立、霊と肉体の対立がこの世である。肉体をもつ人間は悪をおかざるをえない。肉体のもつ悪の要素を極限抑え禁欲的生活をする聖職者のみが、救済される。俗人は聖職者に奉仕することで救済される。悪は本人がするのではない。罪の責任は、闇の君（王）にある。

### 3

第2段階の新プラトン主義的キリスト教思想における、悪・罪の解釈をみていく。

新プラトン主義により、知的回心をした。同時期にパウロの書簡を読むことで、新プラトン主義の真理がみな聖書のなかに、神の恩恵を賞賛しつつ述べられていることを確信した（『告白』七・二十一・27、『アカデミア派駁論』二・二・5）。自分に立ち返り、魂の内をとおり、知性的自己認識にまでいたり、光により不変なもの自体を知る。ミラノの回心である<sup>(3)</sup>。悪徳から離れて徳と節制によって神へと高まる（『秩序』一・八・23）。それは、真理である神のもとにかえることである。神に仕えることである。プラトンが目指した真理が、キリスト教では神の光によりともに照らされているのである（『ソリロキア（独白）』一・八・15）。

新プラトン主義者であるプロティノス、ポルフィリオス、ヤンブリコス、アプレイオスなどの説く悪を、キリスト教的に解釈したアウグスティヌスの悪は、次のとおりである。悪とは、心の健全さを害するものである。富、名誉、女性、食物への情欲が、悪である（『ソリロキア（独白）』一・十・17）。知恵の研究に必要な富、人びとを真理の道に導くために必要な名誉、健康のための食物は、望ましいものとしている。神は、最高善、最高の存在、万物の根元である。神は、最高の知により、無からすべてをつくりたもうた（『真の宗教』三八・35）。だから、神により創造された存在はすべて善である（『真の宗教』三・十八・37、「創世記」一・31、「テモテへの第一の手紙」四・4）。悪が存在するとなると、神は全能でも、最高善でもなくなる。アウグスティヌスは、神がつくりたもうたものは、すべて善であると言いきる。悪とは、最高の善でなく最低の善を、魂（自身）が欲するからである。霊的

な善でなく肉体的善を，知性的な善でなく感覚的善を，最高の善でなく最低の善を欲することに，悪の本質がある。楽園に植えられたリンゴの木は悪でない。神の命令にたいする違反が悪なのである。悪は存在するが，実体として存在するのではなく，善の最低のもの，善の壊敗したものとして理解される（『真の宗教』三・十八・37-38）<sup>(4)</sup>。「それが実在するものでなく，むしろ至高の実在である神，あなたからそむいて，もっとも低いものへと落ちてゆき，内なる自己を投げすてて，外部にむかってふくれあがってゆく転倒した意志にほかならない（『告白』七・十六・22）」。

転倒した意志が，悪理解の根本である。悪は単なる悪（malum）でなく，神の意志に反する，人間の意志の転倒としての悪（victum）である。神によりつくられた人間が，全体として神から離れること，神にそむくことである。悪は神がつくったものでなく，人間の意志が自由であるゆえに迷い，神にそむく間違った方向，壊敗した善，転倒した善へ向かうことである。それが習慣となると，必然性をもって悪をおこなうようになる（『フォルトゥナトゥス駁論』二二）。悪の奴隷となってしまう。意志の絶対的自由を認めていない。だからこそ心からの悔い改めが求められる。救いは，魂を肉体から解放することではなく，魂を研ぎ澄ませ，神に向かうことによって得られる。神を想起し，神を探求し，神に向かおうとする意欲を引き出してくれるのは，完全なる神の恩恵なのである（『至福の生』三・19）。絶えず神を信じ，神に一切を委ねる。自身の自由にしようと欲してはならない。慈悲深い神の下僕であると告白する。そのことにより神のもとに引き上げられて救われる（『ソリロキア（独白）』一・十五・30）。

アウグスティヌスは，神秘的な神直感による内的歓喜にふるえている（『告白』九・十・25）。理性によりみいだす哲学的真理と，絶対的存在であるキリスト教における真理とは区別されていない。新プラトン主義により，マニ教の二元論から解放され，不変にして見えざるもの，空間的に広がるこ



となく存在するものを知ることにより、キリスト教に近づいた。新プラトン主義に接することで、キリスト教を魂の内奥で理解し、人間理解が深まり、悪にたいして真っ正面から向き合うようになった。

## ま と め

神は、絶対的善である。その神が創造した人間も悪でない。おのれの意志により神から離れ、神に背くことで、善の壊敗、最低の善という悪をおこなう。悪は転倒した意志にある。それが習慣となると必然性をもち悪をおこなうようになる。悔い改めて、神的直感で神に向き直ることが、救済への道、至福の生である。転倒した意志を、神に向かわせることで、罪が許され、救われる。

## 4

第3段階の『告白』における、悪・罪の解釈をみていく。

おのれの罪深さに悩んでいたアウグスティヌスは、司教になる前は、人間の善性と意志決定の自由を求め、そこに救いの道を求めようとした。悪の原因を、自分の意志以外の何か実体的なものに求めていたので、その原因をみいだせず悩んでいた。マニ教を知ること、救いを感じた。しかし疑念がわき、新プラトン主義の哲学とキリスト教を深く知ることで、ミラノの回心をする。司教になった後では、善をなしえない無力な人間の現実にもとづいて思索するようになった。

人間は、アダムは墮罪以前は善をなす自由をもっていた。墮罪後には、その自由は失われた。罪を犯さないようにつとめることはできても、罪を犯さないでいることはできない。罪のかたまり (massa peccati) のような人間と絶対的善である神の関係に関する思索の成果が、『告白』である。

神の前で、人間を問いつめていくと、人間の罪の現実があらわになる。神は絶対的善である。神は悪をつくらない。人間が、神により与えられた自由意志を、最高の善を欲するために使わず、最低の善を欲するために使うことに、悪の原因がある。転倒した自由意志が悪の原因である。罪のかたまりである人間をその根底において支えている存在、罪深い人間をゆるし、受け入れてくれる存在が明らかになる。神の愛の働きかけ、あわれみがあらわになる。

人間は「原罪のくびきにつながれている」という（『告白』五・九・16）。悪を愛し、不義を喜ぶ心が潜んでいる。人間は悪徳のかたまりであるという。『告白』第二巻第六章には、アウグスティヌスが16歳のときにおかした果実の盗みの罪が告白されている。アダムが悪魔の誘いで知恵の果実を盗んだ原罪と対比し、人間の罪深さを説き、神なるあなたに贖罪している。高慢（superbia）、野心（ambitio）、権勢欲（potestatem）、媚び（blanditia）、好奇心（curiositas）、無知（ignorantia）と愚かさ（stultitia）、怠惰（ignavia）、贅沢（luxuria）、浪費（effusio）、貪欲（avaritia）、嫉妬（invidentia）、怒り（ira）、不安（timor）、悲観（tristitia）という14の悪徳をあげている。これらの悪徳が一見、ストア哲学のような世間的知恵からは善の様相をもち、神であるあなたを模倣しているようであるから、善のように思われる。しかし悪徳的で、転倒した形の模倣にすぎない。キリスト教では、真の善が神のもとにしかない。それら14が、転倒した悪徳であることを説く。

高慢は、高尚さをまねているので善のように思われる。しかし真に高い存在は神なるあなたのみであるから、悪徳である。

野心は、ひたすら名誉と栄光を求めることなので善のように思われる。しかし万物にまさってほめられ、永遠に栄光に輝くのは神なるあなたのみであるから、悪徳である<sup>(5)</sup>。

権勢欲は、畏怖されることを求めるので善のように思われる。しかし真に怖るべき方は神なるあなたのみであり、神の権力からはなにものも奪えないから、悪徳である。

媚びは、愛されようとする事だから善のように思われる。しかし真に愛される方は、輝かしい神なるあなたの真理であるから、悪徳である。

好奇心は、知の探求の熱心さをあらわすので善のように思われる。しかし最高度に知りたもう存在は神なるあなたであり、絶対的真理である神なるあなたによってのみ、人間の知が得られるから、悪徳である。

無知と愚かさは、単純と無邪気という美名のもとに身をかくしているから善のように思われる。しかし絶対に単純で無邪気なのは神なるあなたのみであるから、悪徳である。

怠惰は、安息を求めることなので善のように思われる。しかし確実な安息は神なるあなたのもとにしかないから、悪徳である。

贅沢は、飽和充満とよばれるので善のように思われる。しかし滅びない甘美の充満、欠けることのない豊富は神なるあなたのみであから、悪徳である。

浪費は、気前の良さをよそおい善のように思われる。しかしすべての善をあふれるばかりに与えるのは神なるあなたのみであるから、悪徳である<sup>(6)</sup>。

貪欲は、多くのものを所有しようとするので善のように思われる。しかしすべてを所有したもうのは神なるあなたのみであるから、悪徳である。

嫉妬は、きそって他にまさろうとすることであるから善のように思われる。しかしすべてにまさる神であるあなたにまさるものは存在しないから、悪徳である。

怒りは、復讐することだから善のように思われる。しかし神であるあなた以上に正しく復讐する者はいないから、悪徳である。

不安は、安全の確保に心をくだしている愛する者が、思いかけず突然それ

に反するものに出会いはしないかと恐れることだから、善のように思われる。しかし愛したもうたものを神でるあなたからひきはなすことはできないから、悪徳である。確実な安全の確保は、ただ神の御許にのみある。

悲観は、情欲により楽しんでいたものを失い、身もほそるばかりに悲しむことだから、善のように思われる。しかし何ものも神であるあなたからとりさることはできないから、悪徳である。

『告白』第十卷第三十章から第三十六章では、自己のなかに潜む罪を、「ヨハネの第一の手紙」を引用しながら、肉の欲（*concupiscentia carnis*）、目の欲（*concupiscentia oculorum*）、世間的野心（*ambitione saeculi*）の3つにまとめている。キリスト教文学の傑作である。

肉の欲つまり肉体の感覚にもとづく欲として性欲を最初の罪としてあげる。神は、私通から遠ざかることを命じた。合法的な婚姻においても、よりよき道をすすめたもうた。無意識の夢のなかでも、清くあれという。神のあわれみにより、性欲に悩まされなくなり、完全な平和に導かれる。

食欲は、健康維持のためでもあるので、性欲のようにきっぱりと切れない欲望である。食べもの自体は、神がつくりたもうたものであるから善である。必要の限度を超えて、口腹の欲を求めるから、悪なのである。飽食、酩酊して、心を鈍らしてはならない。だが口蓋の手綱は、適当に緩めたり引き締めたりしていかなければならない。

嗅覚に関する欲は、アウグスティヌス自身あまり関心がないと告白している。しかし自分の内に悲しむべき暗闇があり、嗅覚への欲に関して、神の命令にそって清い状態にあるか分からないという。

聴覚に関する欲には、アウグスティヌス自身頑強に縛られていると告白している。聖なる言葉がうたわれると、弱き人が、より信心深くなる。熱烈に敬虔の炎のうちにゆり動かされる。うたわれている内容よりも歌そのものにより心動かされていることは、感覚的喜びに心をうばわれていることだから

悪である。だが敬虔の感情にさそうなら善である。教会での歌唱を中止するか続けるかに関して論争があった。アウグスティヌス自身は、敬虔の感情にさそい、神にいたる程度の歌唱に賛成している。

肉の目つまり視覚に関する欲は、美やきらびやかさにとらえられることである。神が、美しいさまざまな形や、まぶしいきらびやかな色をおつくりになった。だからこれらは善である。美は、光ある限り、誘いかけてくる。解放されて休息があたえられることはない。誘惑的で危険な甘美をもつ。美しいものの罠に足を取られ、際限なく追い求める。生活の必要や信心のための必要限度を超えて、目を楽しませるためだけに際限なく消費する浪費の罪を犯すことになる<sup>7)</sup>。神のあわれみによってのみ、救われる。

第2の種類の悪として目の欲（好奇心）をあげる。肉において楽しむのではなく、肉をとおしてむなしいもの、珍しいものを経験したいという欲望・情欲である。認識、学問、知識欲という美名をまとうている。知ったところでなんのたしにもならないのに、ただ知ることだけに、むなしいものを求める。この好奇心が生活に充満しており、祈りをしばしば中断させる。神の大きなあわれみにより救われる。

第3の種類の罪として世間的野心（高慢）をあげる。人から畏敬され愛されたいという誘惑である。汚れたからいばりにすぎない。隣人が自分のいうことをよく理解してほめてくれるのを喜ぶ時、その人の進歩と有望を喜ぶのが、正義である。自分が喜ぶことは、悪である。自分のためでなく、隣人のために心を動かされることが、神の正義なのである。

人間は、善を欲し、善をおこなおうとする。ところが欲した善をおこなわず、欲しない悪をおこなってしまう。この転倒した意志から情欲が生じる。情欲（libido）の、精神が欲することに逆らう働きにより、悪をおこなってしまう。自由意志は情欲の働きに負けてしまい、愚かさの闇のなかにしがみつく。その後、欲望が暴君のように支配し、魂を攪乱する。精神は、恐怖か

ら野望へ、不安からむなしい偽りの快樂へとはしる。愛するものを失う苦痛から、まだもたぬものを得ようとする野望へはしる。不正に受け取ったものの苦しみから、復讐の炎に飛び込む。そしてどこへいっても食欲が締めつけ、贅沢が破滅させ、野望が命令し、高慢がふくれさせ、嫉妬が苦しめ、怠惰が深い眠りにおとし、強情が興奮させ、隷従が疲れさせる（『自由意志』一・十一・22）。このような転倒した意志の状態が習慣化すると、意志の力は弱まり、情欲に支配されてしまう。習慣の力で、自ら欲していない方向へ、自ら意志して向かうことになる。必然という奴隷の状態である（『告白』八・十一・26）。アダムの子孫である人間は、原罪により、罪を犯さないことができないという不自由な状態、つまり罪の奴隷状態にある。このような悪を愛し、不義を喜ぶ心が潜んでいる状態を、原罪という。

この原罪により私が 3 つに分裂する（『告白』八・八・19）。神に従おうとする私（内なる私、魂、精神）、神に従うまいとする私（外なる私、肉体、情欲）、神に従うまいとする私を神に従う私にしようとして、その私を責め、むち打つ私（中間にある私）。

食欲で説明している（『告白』十・三一・45）。食欲は本来、神が恵みとして与える栄養という医薬としてある。神に従い、神の恵みを受けるから美味とよばれ、健康を維持できる。情欲の罣が、神に従うまいとして、腹一杯への満足を「たのしみ」として求めさせる。神に従うまいとする私を神に従わせようとする私は、神が「飽食、酩酊して、心を鈍らせてはならない」（「ルカによる福音書」二一・34）と命ずる声を聞く。性欲は、きっぱりと断ち切ることはできても、飽食の情欲は適当にゆるめたり引き締めなければならない。そこで情欲はしのびより、神に従わないように誘う。別の声「われわれはたとえ食べなくても富むことはなく、食べなくても欠乏することはないであろう」（「コリント人への第 1 の手紙」八・8）を聞くことで、飽食という情欲は離れていく。しかし情欲はさらにしのびより、神に従わないように誘

う。別の声「私はいかなる境遇においても、足ることを学んだ。豊かさのうちにあることを知り、窮乏にたえることを知った。私を強めたもうた方において、私は万事をなしうる」（「ピリピ人への手紙」四・11-13）を聞く。このように神の声を聞き、叫び、神に従う者は、「天軍の兵士」である。だがわたしたち人間は塵からつくれ、原罪を犯した存在である。神の声を聞くだけでは不十分である。神の靈感のいぶきを受けなければ、神の恩恵を受けなければ、情欲の罟からぬけだし、神に従うことはできない。

欲していながら、欲していることをできない状態である。命ずる意志が全意志をもって命じていないから、命ぜられる意志が働かない。「欲する」ことが「できる」ことではない（『告白』八・八・21）。不十分で、いい加減な意志に問題がある。意志しようと完全に意志しない。神と自己を知らないと、心の奥に「内奥の欠乏」を感じ、かえって感覚的欲望を満たそうとして飽くなき欲望に燃えてしまう（『告白』三・三・1）。それは人間が、本来的自己を見失い、地上的な、一時的な欲望に惑わされて、不安と迷いのなかに、自己を、意志を分裂させて生きているからだ。習慣の鎖に縛られ、精神を分裂させ、欲望と罪のかたまりである悲惨な人間を、神はあわれみ、救いたもう。これこそ神の恵である。

神に向かい、おのれの罪を告白する。神に助力を乞う（『告白』十・四一・66）。神は深い愛で、御子をわれわれ不義なる者に委ねられた。人間は、神の恵みを受ける、神の愛を知ることにより、自分の欲していることを欲せず、あなたの欲したもうたことを欲するようになる（『告白』九・一・1）。最高善である神を知ることにより、甘美な幸福感に包まれる（『告白』九・四・10）。現世のものをむさぼり現世のものにむさぼられながら、地上の財をいたずらに殖やそうとは思わなくなる。平和の内に、神の内に包まれる喜びを味わう。

神を愛するとき、外的・肉体的感覚でなく、内的・霊的感觉での喜びに包

まれると告白している（『告白』十・二一・30）。恵み深い神を所有し、神に好意をもたれる人のみが、至福の生を得るのである（『幸福の生』三・19）。『告白』には、新プラトン主義の神秘主義的傾向が残っている。キリスト教の伝統としての神秘主義である<sup>(8)</sup>。神を愛する時は、肉の欲が目指す物体の美しい形、過ぎゆくもののおびる魅力、光の輝き、歌曲がもつ甘美さ、花や香料の香り、マナや蜜の味や、肉の抱擁における心地よさがあるのでない。神は、わが内なる人間にとっての光、声、香り、食物、抱擁であるから、神を愛する時、いかなる場所にもとらわれない光が心を照らし、いかなる時にもうばい去られない音がひびき、いかなる風にも吹き散らされない香りがただよい、食べて減ることのない味わいと、飽きて離れることのない抱擁がある、と告白している（『告白』十・六・8）。

それは神を、記憶をこえた神において知ることである（『告白』十・二五・36）。神を知るのは、「私をこえたあなたにおいて」でなければならない。記憶のうちの「けもののような部分」を超越しなければ、神を見いだせない。さらに物的な事物の心象の部分の記憶のうちにも、神を見いだせない。神に関する根源的知は、記憶をこえた神において得られる。自己が自己をこえ、神の内にあることにおいて得られる。精神は、最も奥深いところで、超越者である神に向かい開かれている。聞きたいことを神に求めても答は得られないかも知れない。だが神から聞くことをそのまま受け取りたいと心がける人は、神のしもべとして、明確に答えたもう。

神を愛することを、『キリスト教の教え』では、神を楽しむことと表現されている。楽しむつまり享受（frui）とは、あるものにそのもの自体のために愛によって関わることである。用いるつまり使用（uti）とは、生活に必要なものを獲得するために、愛を向けることである（『キリスト教の教え』一・四・4）。楽しみの対象は、永遠なもの、神そのもの、神に関する事柄（三位一体、神の言葉の受肉、平和、教会など）である。神の愛は、神が人



間を愛するのでなく、神が人間をして神を愛する者とせしめる愛である。神は享受されるべきであり、使用されるべきでない（『キリスト教の教え』一・三二・35）。神を愛することではなく、神に好意をもたれることが至福である（『至福の生』三・19）。徹底的な神中心的愛である。神への純粋な愛・カリタス（caritas）である。

神の愛の働きかけは、神をよび求めるより先にある。神に向き直ることができるのは、神の愛・あわれみが、人間に先立つからである（『告白』十三・一・1）。信仰も善行も神の賜である（『信仰・希望・愛（エンキリディオン）』二・三・31）。神の愛・恵みが、人間のすべての業に先行している。人間は神の恵みがなければ意志することもできない（『シンプリアヌスへ』一・一・11）。神のわたしたちに対する愛は、比較を絶するほど大きく、何かをもとめる愛でなく、純粋な愛である。自分が神に愛されていることを知ることで、消えかかった愛の炎を再び燃やせる。犯した罪により、愛されるに値しないのに、神はイエスをわたしたちのために捧げたもうたほど、わたしたちを愛している。神の愛に応えて、神に向き直る。神の愛により、転倒した自由意志を、正しい方向へ向ける。悪でなく善をおこなう。

第3段階の大きな特徴は、神の恩恵が、人間の自由意志の先にあるとの確信である。信仰の出発点も、神の愛により与えられるのである（『シンプリアヌスへ』の『再考録』二・一・1）。神を愛することも神の恩恵である。生活のすべてが神の恩恵に依存する。卑賤の哲学ともいえるほど、自己をひきさげ、神をたかめている。

## ま と め

すべてを知り、絶対的真理・善である神、慈しみ・愛（caritas）の神が先に在る。その神の前にあるのに神に向かわないで、悪の誘惑から逃れられない悩みに苦しむ人間の悲惨さがある。自由意志では、自分だけでは、分裂

した私＝意志が、悪へいざなってしまう。肉体をもつ人間は、悪をおかさざるをえない。悪から逃れられないが、悪から離れようともする。神の恩恵により、悪へといざなわれてしまう自己の弱さに気づき、神に向かい、罪を告白する。神を愛する (amor)、内なる神を求める、内面へ還帰する、魂の声を聞く、パウロの霊に従って生きる、神を知る、これこそ聖なる悦楽、至福の生の実現である。

## 5

第4段階のペラギウス主義者達との論争により、悪・罪の認識が深化したことをみている。

アウグスティヌスが神の恩恵の働きを強調することは、人間の自由意志と善行への努力を否定するとして、ペラギウスから批判された。412年からペラギウスとかれの弟子たちとの論争が始まり、その論争をとおしてアウグスティヌスの罪と恩恵の思想は進展し、深まっていく。

ペラギウスは、4世紀の中頃ブリテン（イギリス）にキリスト教徒の両親のもとに生まれた。アウグスティヌスと同じ頃ローマにきて、道徳的厳格さを守る平信徒のまま、数冊の本を書き、多くの信奉者と支持者をもった。しかしアウグスティヌスは、ペラギウスの教えが異端であると主張し、ペラギウスを批判する書物を、412年から書き始める。『告白』第十巻の有名な祈り「あなたの命じるものを与えたまえ、そしてあなたの欲するものを命じたまえ」の箇所に、ペラギウスが人間の主体性・自立性を否定するものであると激昂し反論したことを、アウグスティヌス自身が、429年に書いている（『堅忍の賜物』二十・53）。412年から、ローマの弁護士カエレスティウスとエクランムの司教ユリアヌスたちも論争に加わり、アウグスティヌスをマニ教の誤りに陥っていると激しく非難した。ペラギウスの教えは、418年カ

ルタゴ会議で、アウグスティヌスの主張により邪説と判決された。しかしペラギウスを信奉し続ける司教たちが残り、アウグスティヌスと論争を繰り返す。

ペラギウスとかれの信奉者たちは、社会の道徳的頹廃を刷新するために禁欲的生活を説いた<sup>(9)</sup>。ペラギウス主義者は、まず人間本性の無罪性を主張する。神が人間をつくったのだから、人間が悪をたずさえて生まれることはない。人祖アダムの罪によっても、善を実現できるという自然本性は弱められていない。アダムの罪も悪例の一つに過ぎない。キリストの贖罪により原罪の罪はすでに贖がなわれており、すべての人は救われるという普遍的救済論にたっている。人間が神により自由意志を与えられているので、善悪を判断でき、正しい生き方をできるとする。自ら努力して立派に生きようと志せば、神が恵により助けてくれる。自由意志が責任をもたらし、責任が道徳的完成を導く。アウグスティヌスの恩恵論を、主体性のない、自律性の欠如した人間観のものとして批判した。ペラギウスは、良く生きようと意志すればできるという。人間は、「もし欲しないならば、罪を犯すことはない。神は人間の意志に不可能なことを命じはしない」(『罪の報いと赦し、および幼児洗礼』二・三・3)。神は恩恵でそのような本性(自由意志)を与えた。神が人間を教え、導き、助けることが、恩恵である。神の教えにそむき、悪をなすならば、罪である。自由意志と恩恵は内容的に同一である。この自由意志により律法を実現し、永遠の生命に値するという功績思想を転化しているので連続的である。アウグスティヌスのような、神の計画により救いが予定されているという教えは、罪人の悔い改めの意志を奪い、善人を怠惰に導くと否定した。

つまりペラギウスは、人間を人間としてのみとらえる<sup>(10)</sup>。人間を「人間の前で (coram hominibus)」論ずる。アウグスティヌスは、人間を神との関係で、つまり「神の前で (coram deo)」で論ずる。有限で、肉体の感覚

に誘惑されるような人間の前では立派に見えても、永遠の真理、絶対的善である神の前に自己を置けば、自己の無知を知らされ、罪を免れない。たとえ善悪を判断することができても、その判断に従って善のみに向かい、悪を避けるように生きられない。人間は現実には、肉体をもっている以上、情欲の支配から逃れられない。無知で無力な存在である。無知で無力は、善へとむかい、悪から遠ざかろうとする意志を動かなくする悪である（『罪の報いと赦し』二・十七・26））また人間はアダムが毀損した原罪に服して生まれているので、キリストの再生なしには、断罪に向かう。自然のままで義たりうるならば、キリストの死はむだになる（『自然と恩恵』二・2）。高慢、傲慢とは、人間が被造物であることを忘れ、自ら善悪の判定者となり、立派に生きているという思いである。ペラギウスの説は、この高慢の罪をおかしている。自分の無知、無力を忘れ、自己を過信する、自己を愛する生き方こそ悲惨な状態であり、原罪である。だがこのような弱さ、悲惨さ、不完全の認識から、謙虚な生き方と他者への配慮が生まれる。罪深い人間の功績ゆえにでなく、神の一方的あわれみにより、恩恵を受け、義人となる。神の恩恵の根拠は、人間の側の自由や功績にあるのではなく、神の側の自由な選び・予定に求められる。神の意志の絶対性が強調されている。人間の意志の自由を認めたくて、神の意志の絶対性を説く。神の意志されないこと（悪）をおこなう人でさえ、神ご自身は自ら意志したもうたことを成就されるのである（『叱責と恩恵』十四・43）。罪の教説が、神の恩恵を強調する。

アウグスティヌスは、ペラギウスの自由意志と恩恵の連続説を否定する。アウグスティヌス自身が、第2段階の新プラトン主義的キリスト教を受け入れた時代の理想主義の弱点や矛盾点を、ペラギウスの連続説のなかにみただけである。アダムの墮罪以降、自由意志は奴隷的拘束のうちにある。神の恩恵によってのみ自由にされる。神の愛として精霊が人間の心のなかに注がれ、心をつくりかえ、喜んで律法を実現するようになる。神の愛により開放され

た自由意志が、義への愛を生み、愛が律法を成就する。ペラギウスのように、人間の自由意志が律法を実現し、永遠の生命をもつ、とは言わない。神の恩恵が自由意志に先行する（『霊と文字』三十・52）。

確かにペラギウスが主張するように、聖書も自由意志を認め、律法を実行することで報いが与えられることを説いているとして、掟—自由意志—報酬という連続する基本系列を、アウグスティヌスも認める（『恩恵と自由意志』二・2-4）。神の恩恵は、人間に自由意志を与えた。だがこの段階の自由意志は、自由とされていない。悪にむかう可能性をもっている。最初の人アダムの墮罪以前における自由は、罪を犯さないことができる自由という、きわめて小さいものである。最初の人アダムは悪魔の誘惑に負け、悪を意志したのである。アダムにより生じた壊敗のかたまりが結実し、自然本性の壊敗が全人類に波及したのである（『キリストの恩恵と原罪』二・二九・34）。これが原罪である。神は、「わたしたちなしに（sine nobis）」、つまり人間の意志の先においてわたしたちに働きかけ、善を意志するようにさせる。活動的恩恵（*grantia operans*）である<sup>(11)</sup>。神の恩恵が人間の自由意志に先行する。人間が律法による試練にあり、罪と戦うことのなかに働きかける。アダムによりおきた原罪はすべての人に及び、邪悪さをすべての人がもっているが、この呪うべき根源は神により譴責されねばならない。神による譴責の苦しみこそ、神への祈りの愛情を目覚めさせる。そこで意志は、祈りによる恩恵を求めるようになる（『譴責と恩恵』十六・49）。譴責という神の恩恵により、罪深い現実と戦える。悪い意志の人を良い意志に改造する。小さく弱い意志から大きく強い意志に成長できる。神の律法を、自由に実現できるようになる。共同的恩恵（*gratia cooperans*）である（『恩恵と自由意志』十七・33）。わたしたちが意志しはじめると、神は「わたしたちとともに（nobiscum）」共同して完成に導く。恩恵なしには何もできない。これは、恩恵と自由意志が統合しているという共同説（*synergismus*）でない。アウグスティヌス

が説く共同的恩恵におけるキリスト教的意志は、神からの恩恵により、罪人である人間が罪から解放されようとする自由、罪をおかすことができないようにしようという偉大なものである。意志自体のなかに、試練一祈り一恩恵という内的プロセスが挿入されている。神の恩恵の援助なしには、自由な意志決定は神にむかうこともできない（『恩恵と自由意志』八・19、『書簡二一四 ウァレンティヌスへの手紙（一）』7）。だから掟一自由意志（試練一祈り一恩恵）一報酬と、連続していない。恩恵という報酬が、人間に依存せず、神の一方的あわれみ・愛における譴責にある。功績を排除した恩恵が、義認にさいして意志に先行し、かつすべての行為にともなわなければならないという徹底した先行的恩恵論を唱えた（『聖徒の予定』二・3）。

功績に応じて恩恵が与えられるとしたら、それは恩恵でないと、「恩恵によるのでなければ、業によるのでもない。そうでなければ、恩恵はもはや恩恵でない」という「ローマ人への手紙」（十一・6）を引用し、言いきる（『恩恵と自由意志』八・19）。ペラギウスのように恩恵功績説を唱えることは、高慢の罪を犯している（『自然と恩恵』三一・35）。功績によらなくても、神は人間にすべてのものを与えている（「コリント人への第一の手紙」Ⅳ・7）。すでに満腹であり、すでに富み栄えているという。パウロが、働いてきたのは私自身でなく、「私とともにあった神の恩恵（恵み）」であるという（「コリント人への第一の手紙」一五・10）。救いのイニシアティブは、神の側にある。恩恵の絶対性は、人間に依存しない。人間の自由でなく、神の自由を強調する。

神の恩恵は普遍的でもある。すべての人に恩恵が与えられ、救われる。現実の戦いのなかで、自己の意志で掟を破り悪に荷担した人でさえ、神は救う。アウグスティヌスが、「十分な恩恵」でなく、「十分であっても有効でない恩恵」を説いているという批判があり、論争がおきている<sup>(12)</sup>。十分な恩恵ならば、人間を悪に荷担させない。だが悪をおこなった罪人でさえ、神は救い

たもう。だから神の恩恵は、十分であっても、有効でない、と批判された。

ユリアヌスが、神の恩恵を強調すると宿命的な必然論になり、人間を善とみなさざるをえなくなるのに、なぜ神は善を欲しない者の意志を変え、善のみに向かわせないのかという鋭い問いをした。アウグスティヌスは、深淵な問いであることを認める。神は、助けようと欲する者と、欲しない者を分けている。だが神に不正はない。悪行もないのに断罪することはない（『ユリアヌス駁論』四・八・45）。神はヤコブにはあわれみを、エサウニは正義を示した。ここに窮めがたい神の判断があり、神に不正はない（『書簡一八六 司教パウリヌスへの手紙（三）』五・14）。善行がなくても、受けるにふさわしくない恩恵が与えられる。恩恵が与えられる場合、その人の功績や意志とは無関係にである。神の一方的あわれみによって与えられる。恩恵が与えられない場合、それも神の正当な裁きである。

ペラギウス主義者は、人間の自由意志による、神の教えを守り、祈り、善をおこない悪を避ける禁欲的生活への努力という功績を積むことで、完全な義を得れるとする。さらに神の恩恵があればよりたやすく律法を実行できる。アウグスティヌスは、「自由意志によっておこなうように命じられていることを、恩恵によってより容易に実現できる」とするペラギウスの説を、傲慢の罪をおかしているとして厳しく非難した（『キリストの恩恵と原罪』一・七・8）。またペラギウスが言う原罪は、アダムが示し、多くの人たちが倣った悪しき模範にすぎないから、アダムの墮罪以降も罪のない生活の可能性は原則として認められるという説も否定する（『キリストの恩恵と原罪』二・十五・16）。ペラギウスにあっては、無罪性の主張が、自立的人間観を生みだし、報酬としての恩恵論へとつながっている。アウグスティヌスにあっては、原罪を認め、人間が無知で、罪のかたまりであることから出発する。善を欲しても、悪に落ちざるをえない。神に向かおうとしても、情動に支配されてしまい、罪をおかしてしまう。ペラギウスのように、自己の自由意志に

より悪を避け、神に向き直り、善をおこなえるとは言わない。人間はそのままでは神の内に入れない。だからこそ大いなる神は、恩恵を与える。人間は、恩恵に値しないのに、功績がなくても、神の一方的あわれみ・愛により、恩恵が与えられ、義人とされる。罪人が罪人のまま、神の自由な選びと予定により、神の義を受け、義人となる。ペラギウス主義者との論争を通して、「十分な恩恵」から「有効な恩恵」に力点が移ってきた。神の恩恵により救われ、至福の生をおくれる喜びより、恩恵に値しない罪人でさえ救われる神のあわれみ・愛の大きさ、神の全能と自由さへの感謝・信頼に重点が移っている。神への全面的帰依、最後まで信仰を堅持し続ける堅忍でさえ、神の賜物なのである（『堅忍の賜物』十三・33）。自己の弱さ、不完全性を強く認識するようになり、神の自由さ、絶対性への信頼感を強めた。神の前に立つ人間が、「小さいながらもあなたの被造物の1つの分として、あなたを讃えようとする」存在となる（『告白』一・一・1）。

## ま と め

まず先に絶対的な神の意志と予定と活動的恩恵・愛がある。それなのに無知で無力な人間が現実での悪との戦いに負け、悪に向かう。さらにアダムの原因による悪への意志の傾向が強い。神に向かいたいができない悩み、善をおこないたいが悪をおこなってしまう苦しみ、原罪にたいする神の譴責への恐れで、悲惨な試練の生、病んだ生をおくる。だからこそ神の愛により、神の自由で一方的な共同的恩恵と予定により、罪人のまま神に向かい祈り、神を讃える。神への全面的帰依により、義人としての生をおくることができる。

## 6

アフリカ第1の都市はカルタゴであった。アウグスティヌスが青春をすご



した街であり、会議などでたびたび呼び出された街でもある。アウグスティヌスが司教としてすごしたヒッポ・レギウスは、アフリカ第2の都市であった。2つの都市を中心に、アフリカにおける民衆の生活、とくに本稿で問題とする浪費や贅沢な生活をみていこう。アマンの『アウグスティヌス時代の日常生活』を中心に、アウグスティヌスの説教や手紙という生の声を織り交ぜながら論じていく。

ヒッポの金持ちの豪華な邸宅は、財宝で満ち足りていた。寝台も、便器でさえ黄金でできていたという。すばらしいモザイクの壁と舗装もあった。その特権階級の生活は、「狩り、沐浴、賭け、笑い」であった<sup>(13)</sup>。金持ちは、市民への贈り物として、犬の熊狩りの実演や、見たこともない見せ物を提供して、劇場で最大の拍手喝采で迎えられる。集まりのなかからおきる賛同の声により激賞される。誰も逆らわない。銅板に、ローマ市民と近隣種族の保護者であると刻印される。像が建てられ、栄誉が溢れる。市政職の一般以上の権能を捧げられる。食卓が毎日の宴会で豊かに盛られ、欲しいものや快樂がすべて手に入れられ、要求しない人びとにまで多くのものが惜しみなく与えられる。財産が、膨大な浪費に見合うように準備されている。壮大な屋敷に住み、絢爛たる浴場や、栄誉にふさわしい遊技や宴会や、庇護者達の讃辞や、市民達の讃辞のなかですごす。最も人間的で、気前が良く優雅で幸運に恵まれた人であるという民衆の讃辞のなかに立つ。金持ちはこのような生活をすごし、幸福と感じていたのである。アウグスティヌス自身は金持ち階級の生活を、至福の生でないと書いている（『アカデミア派駁論』一・一・2）。アウグスティヌスは、聖にして甘美なものは、金や銀、宴会や贅沢、狩猟や魚釣り、格闘や娯楽、滑稽な演劇、滅びゆく名誉の追求や獲得などにないと、金持ちの生活を批判している（『詩編注解』第三八編 説教二）。

貧富の差は大きく、貧しい生活をする人が多かった。異邦人と奴隷の住む街は、きたなく、悪臭に満ちていた。広大な広場では商売や裁判がおこなわ

れた。広く優美な公共浴場、劇場もあった。キリスト教徒街として、大バジリカや、司教の館、図書館、修道院、礼拝堂、洗礼堂などが広大な敷地に散在していた。市場では、穀物、油、野菜、海産物、織物、金銀などさまざまなものが活発に取引されていた。商人にはキリスト教徒が多く、アウグスティヌスは、かれらを監督し、正義を説き、不正な利益をいさめている。アウグスティヌスは、彼らのなかで生活し、見守った。

教会はおしゃれの行き過ぎにたいして節度を求めた<sup>(14)</sup>。アウグスティヌスは、光こそ唯一の衣装であると語った（『告白』十・三四・52）。女性のおしゃれは、インドか中国からもたらされた高価な織物、玉虫色の光沢や縞模様のある布地、金糸でおられたロープ、髪型や宝石、化粧にむけられた。金髪にするために髪を脱色する女性もいた。髪に凝る女性も多かった。アウグスティヌス自身は、贅沢な衣装を着なかった。しかしカルタゴやローマの司教は、贅沢な衣装に身を包んだ<sup>(15)</sup>。

食べものでも、金持ちは贅沢の極みを追求した<sup>(16)</sup>。肉は、牛、豚、山羊、ウズラ、カモシカ、ウサギ、凝った肉としてクジャク、紅鶴、オウムなどが食された。魚は貧者の食べものであった。金持ちは伊勢エビなどの高級魚を食していた。デザートとしてイチジク、ぶどう、リンゴ、レモンが供された。銀のスプーン、金や銀の器で食した。貧者は、かゆが主食で、雑魚、塩漬けの魚などを食していた。ときに金持ちが、飢えた貧者に施しの供養をすることもあった。説教でこの施しを大いにすすめている。アウグスティヌス自身の食卓は質素であった。野菜と果実が主食で、肉は来客がある時と病気の時だけ。ぶどう酒は毎日供された。食卓の楽しみは、朗読や有益な談論であった<sup>(17)</sup>。「飽食、酩酊して、心をぶらせてはならない」（「ルカ福音書」二一・34）という神の教えを守った（『告白』十・三一・45）。

共同墓地での祝祭と酩酊が、殉職者の名誉をたたえとするドナトゥス派の行為を批判した<sup>(18)</sup>。アウグスティヌスは、酒宴と酩酊が個人の家でなさ

れ場合には、忍耐できる限り我慢するが、教会や聖なる場所で、殉教者への敬意としておこなわれることは禁止されるべきだと説いた（『書簡二十二 アウレリウスへの手紙（一）』一・3）。

男にとり大事なことは公の生活で成功することであった<sup>(19)</sup>。豊かな人びとは、いつも取り巻き連や被護者に囲まれていた。人びとの評価を得ることに熱心で、自分の権威を大事にした。野心と権勢欲にとりつかれていた。

アフリカの大地は、小麦と油のおかげで豊かであった<sup>(20)</sup>。だが一握りの金持ちが、巨大な富を支配し、多くの民は貧しかった。ネロ（在位 54-68 年）のころは、アフリカの土地の半分は 6 人の大土地所有者の所領であった。4 世紀でも、大土地所有者が独占していた。かれらは、属州監督や知事の期間に、いかがわしい手段で土地を私有化した。アウグスティヌスは繰り返し、貪欲を叱責し、貧者の復権を説いた。「どんな貪欲からも遠ざかりなさい」（「ルカによる福音書」十二・15）、生命ははかないものであると強調した（『共感福音書説教』説教一〇七・4）。

偽りの豊かさでなく本当の豊かさをもちなさいと、説教した（『詩編注解』第一〇一編 説教一・1）。黄金、銀、屋敷、土地は、本当の豊かさでない。神をとおしてつくられた才能、記憶の働き、さまざまな生活態度、命、身体、健康や、感覚、姿態のつりあいなどは、無傷に備わっているなら、貧しくても豊かである。神をとおしてつくられた信仰、敬虔、正義、愛、純潔、良い生活態度をもつ者は、真に豊かである。すべてをつくりたもうた神は絶対的に豊かである。他人がつくったものを持つだけの金持ちは、豊かだといえない。金持ちのお金そのものが悪でなく、その貪欲が悪であると説く（『詩編注解』第五一編 会衆への説教 14）。金持ちは、ラクダが針の穴をとおることが不可能であるように、天国にはいることは困難である。持ち物をすべて売り払い、貧しい者に施し、神に従うことは、天に富を積むことだから、救われると、「マタイによる福音書」第十九章を引用して説いている。だか

ら非難されるのは、金持ちのお金でなく、食欲である。富そのものは非難されない。「創世記」第十三章で書かれているように、アブラハムは家畜と金銀に非常に富んでいた金持ちであった。だが神のあわれみに依り頼んだから、救われた。不確かな富に望み・信頼を置く傲慢さ・食欲でなく、生ける神に望み・信頼を置く敬虔さこそ、天国への道である。貧しい者が食欲であれば、救われない。金持ちに食欲がなく、慈善をおこなっているならば、救われる。金持ちの余剰は、貧しい者の必需品である。かれらはそれを受ける権利がある。余分な物をもっていることは、他人の財産をもっていることだ。余分な物を与えないことは盗みであるとも説いている<sup>(21)</sup>。

神を「呼び求める」(invocare)というアウグスティヌス神学で重要な概念をもちい、地上の富でなく、心の富を積むことを説いている(『詩編注解』第五二編 説教8)。金持ちになるために神を呼び求める者は、神を呼び求めているで、富だけを呼び求めているに過ぎない。呼び求めるとは、自分自身のなかに神を呼ぶことである。神は、呼び寄せた者の富となる。神が満ちたすのは、金庫でなく心である。神を呼び求めることで、神自身があなたのもとにきて、神自身があなたの富になる。

金持ちの態度を批判し続けた教会も、遺贈、購入、寄付、贈与により経済的力を備えるようになっていった<sup>(22)</sup>。ヒッポのドナトゥス派の教会は、遺贈や寄進により多くの土地や財産を持ち、裕福であった<sup>(23)</sup>。教会にとり、金持ちの司教をむかえるのが最短の富裕化であった。富豪中の富豪といわれたピアニウスを得ようと、ヒッポとタガステは争った。清貧のうちに生きることを望んだピアニウスは、タガステに莫大な寄付をした。土地とお金がいにも金銀の宝石、豪華で値の張る幕布もおくられた。80人収容の男子修道院と、130人収容の女子修道院も建てられた<sup>(24)</sup>。この大金持ちのピアニウスを司祭にして、ヒッポの住民たちが潤うことを狙った事件に関して、アウグスティヌス自身の食欲から発したことでないことを、手紙で書いている

(『書簡一二六 ピアニウスの義母アルビナへの手紙』1)。アウグスティヌスと弟子達は、福音的貧しさへの回心と神の民への奉仕とを通じ、奢侈と富にたいする輕蔑の態度を示し続けた。

コンスタンス帝（在位 337-350 年）が、商業を営む聖職者は貧しい者のために営んでいるとみなしてかれらにたいする課税を廃止して以来、税金逃れの不正が、大幅に教会でおこなわれた。345 年アフリカの教会会議は、教会が、土地の経営、不正な商売、とくに金融業を営むことを禁じた。

教会は、地代や信徒からの寄進により、貧しい者たちを養った。ヒッポでは、貧しい人びとへ衣服を提供する慣習があった（『書簡一二二 ヒッポの人びとと聖職者達への手紙』2）。教会の祝日には施しがおこなわれた。信徒達も、慈善を組織化し、孤児、未亡人、侵略の犠牲者などの困窮者や異邦人を受け入れていた。

食欲と放逸をやめて、施しをすることをたびたび説いている（『説教八六』6）。食欲は、貯蓄とよばれ、将来のことを考えて、あなたのために蓄えなさいという。放逸は、消費とよばれ、魂によいことをするために消費しなさいという。矛盾するのでどちらもできない。贖い主は、天に富を積むことを命じたまう。施しは、一ポンドの銀を神に貸し、一ポンドの金を返済してもらうことだ。施しは、永遠の生を実現し、魂を喜びに満たす。施しをしない者は、悪魔と手下のために用意してある永遠の火に入れられねばならない。不敬虔な者、姦夫、殺害者、詐欺師、冒涇者、神に罵詈雑言をあびせる不信心な者であると断定している（『共観福音書説教』説教六十・9）。貧しい人びとへの施しは、主の審判の時に祝福される。施しにより、罪は許される。

アウグスティヌスは、悪の根元である欲望や食欲をあきらかにするために、金持ちの心のひだにまで入りこみ、富の空しさを強調し、過剰と貧困を一つにして、人びとを救済することを説いた。

見世物と演劇に、若い頃のめり込み、心をうばわれたのだが、司教として

否定する<sup>(25)</sup>。剣闘試合は、404年に禁止されたが、人気のある娯楽であったので、続けられた。剣闘士には莫大な報酬が支払われた。マルクス・アウレリウス・アントニヌス（在位161-180年）は、報酬を規定した。一般の剣闘士は最低1,000セステルティウス、最高5,000セステルティウスの報酬を受け取った。第1級の剣闘士は、5,000セステルティウスから15,000セステルティウスを得た。当時の軍隊の兵士の年報は、1,500セステルティウスから2,000セステルティウスであったから、莫大な報酬であった。剣闘試合は大衆へのこの上ない贈り物であったが、一試合30,000セステルティウス以上の費用は、金持ちにとっても負担であった。劇場では、女優の衣装に莫大なお金が費やされた。金持ちはアイドルに贈り物をし、扶養する。貧しい人びとも、金持ちが提供する見せ物や演劇を要求し、楽しんだ。アウグスティヌスは、これらは、富める者の懐を空っぽにし、貧しい観客の心を空っぽにする悪行であるとして、否定した（『告白』三・二・2）。

葬儀においても、異教徒達は浪費した<sup>(26)</sup>。死ぬまで豊かな富を誇り、死体には華やかな衣がまといわれ、ふんだんに香料や薬品が詰められた。盛大な葬儀には、親族、友人、使用人、奴隷まで参列した。大理石の墓の上では、酒宴が張られ、夜明けまで、お祭りのように騒がしい宴会が続けられた。音楽は悪霊を追い払い、死者を慰めるために、騒がしく奏でられた。良心的なキリスト教徒は、浪費や見せびらかしの葬儀をさけた。アウグスティヌスは、敬虔の念をもち、食べものや金銭を貧しい人びとへ提供されることこそ、死者を慰めることになる」と説いている（『書簡二十二 アウレリウスへの手紙（一）』一・6）。長い慣習は、アウグスティヌスたちの努力により、次第に変えられていった。葬儀のときの宴会は、貧しい人びとへの食事のもてなしへと次第に変わっていった。元老議員パンマキウスの妻の葬式の時、ローマの貧しい人びとへ食事を振る舞ったのは有名で。

聖キプウリアヌスのような殉教者への祝祭は、大宴会と乱痴気騒ぎにまで

墮落したと、アウグスティヌスは嘆いている<sup>(27)</sup>（『書簡二九 アリピウスへの手紙（一）』9）。異教徒の群衆は、豪勢な祝宴と酩酊で、自らの偶像と一緒に祝祭を祝うことになれている。教会が飲食店になり、着飾った男女が物陰で姦淫にふけっていると批判している。

ヒッポの民衆は、このように食欲で、浪費を楽しみ、肉と目の喜びと野心を追い求めていた。またかれらは、アフリカの民がそうであるように、喜怒哀楽が激しく不安定で、その上喧嘩っ早く、理屈をこね、見栄を張り、吝嗇であった。そのようなかれらと日日接し、かれらの日常的出来事に目を配り、罪のかたまりである民衆をすこしでも神に向かわせることを、司教の任務とした。説教では、人びとの心理を読み込み、友人のように話しかけ、拍手喝采を受けることもあった。時には厳しい父親のように、激しく叱責し、人びとを青ざめさせ、泣かせることもあった。信徒たちとの一体感が生まれていた<sup>(28)</sup>。しかし裏切られることも多かった。民衆は、教会より劇場を好んだ。飲酒の罪を教会で説教された後、居酒屋で泥酔した。

司教の多忙な任務の傍ら積み重ねていった、アウグスティヌス自身の日々の思索では、絶対的神の前での人間の弱さ、善を欲しながら悪におちいる人間の愚劣さと自己の罪深さを自覚していった。司教の任務はむなしく、信徒は、無知で頑迷であった。かれの民衆の救済の祈りは、死の間際の、ヴァンダル族によるピッポの街の包囲によりかなわなかった。思索において自己の罪を問い詰めていくと、神に全面的帰依をすることにより、絶対的愛であるカリタスに包まれる至福の生を実現できることを、神に感謝する段階に達した。だがペラギウスたちとの論争を通して、自由意志による救済を否定し、神の絶対的恩恵にたいする全き信頼と帰依を表明し、神の絶対的に自由な予定と堅忍の業に耐えることを確信するようになった。人間の無力さ・無知・愚かさにつながる。神の一方的あわれみをこい願い、神を賛美する、「小さい被造物の1つの分」としての自覚にふるえた。430年76歳で死

ぬ。死のまぎわ、贖罪に関するダビデの4つの詩編を書き写した紙片を毎日読んでは、ひっきりなしに痛恨の鳴き声をあげていたという<sup>(29)</sup>。一人の疲れた老人の精神のなかにおきた悲劇的硬直をみることができる。

## ま と め

アウグスティヌスは司教として肉の欲、目の欲、野心という悪に染まっているアフリカの民衆の現実を直視し、食欲と放逸の罪をおかさず、神に向き直ること、施しをすること、心に富を積むことを、繰り返し説いた。貧富の差が大きかったアフリカにおいて、富そのものを否定していない。金持ちの食欲を、「豊かな欠乏」として非難している。真の富は、黄金や屋敷などの物質的なものにはない。真の富は、神をとおしてつくられる才能、記憶の働き、生活態度、命、健康などである。だから金持ちが、ありあまる富を、自分たちの享楽や浪費に使わないで、貧しい者への施しに使うことは、天に富を積むことだから、神により救済される。金持ちの余剰は、貧しい者の必需品である。大多数の貧しい民衆にたいしても、見世物や演劇の享楽、飽食や酩酊の快樂を、心を乱すこととして否定した。地上の富や肉体的快樂のむなしさを強調し、過剰と貧困を一つにして、天の富や喜びを求めることを説いた。

## 7 全体のまとめ

アウグスティヌスは、自己の罪深さに悩み、悪の根元を問い続けた。自己の内面の最も深いところまでほりさげ、神の愛・恵みの大きさ賛美し、人間の罪深さと無知・愚劣さを告白した。アウグスティヌスが、悪と罪に関して探求した段階を4つに分ける。

第1段階は、マニ教を受け入れた時期の考えである。天と地、光と闇、精



神と情欲という二原論から、悪の根元を地、闇、情欲にもとめた。この世は、闇の大王が、天と光と精神を浸食しているので、人間が悪をおこなうのは、闇の王のせいである。厳しい禁欲に耐えられる聖職者のみ、闇の王の支配を逃れ、善をおこなえる。一般の人は、その聖職者に奉仕することで、救われる。天と地、精神と情動など合理的説明の教えであるとして、9年間信じた。

第2段階は、新プラトンのキリスト教の考えを受け入れた時期の考えである。神は万物の根元、最高の存在、絶対的善の存在である。神は悪をつくらない。神から与えられた自由意志を、最高の善でなく最低の善へ、霊的善でなく肉体的善へ向けることに、悪の根元がある。神の恩恵により、魂を研ぎ澄まし、神を想起し、神に向き直ることができる。この神秘的直感により、至福の生が実現する。

第3段階は、司教となり、善をなしえない無力で愚昧な人間を、神の前で問いつめ、罪を告白し、神を讃えた時期の考えである。原罪のくびきにつながれた人間は、罪のかたまりである。善をおこなおうと欲するのに、悪をおこなってしまう。意志も3つに分裂し、善をおこなえない。肉の欲、目の欲、野心という悪が、人間を支配する。その悪が習慣化すると、悪が必然となる。このように悲惨な、病める人間を、神は無償の愛で救ってくださる。罪を告白し、神を見、神の内にはいることで、悪をおもわなくなる。神を愛することを告白することで、心の最も深いところで神に開かれる。自己の弱さを告白し、神の偉大さを讃えることで、救われる。

第4段階は、ペラギウス主義者たちとの論争で悪の認識が深まった時期の考えである。ペラギウス主義者は、アウグスティヌスが、救いにおける神の恩恵を強調しすぎて、人間の善行への努力、人間の自立性を否定してしまっているとして批判した。アウグスティヌスは、ペラギウスたちの功績主義を、傲慢の罪をおかしているとして否定した。かれらとの論争を通じて、神の前に立つ人間がさらに小さく、無知で無力になった。アダムの墮罪以来、人間

の自由意志は原罪の拘束から逃れられていない。幼児ですら罪のかたまりである。神に向かえない悩み、善をおこなおうとして悪をおこなってしまう苦しみという悲惨な試練の生をおくる。だからこそ慈悲深い神は、この罪人を純粋に愛し、一方的に恩恵で救い、譴責で励まし、堅忍の生をおくることを命じる。人間の罪深さ・無力さの認識が強まり、その人間を救う神の自由さ・絶対性の認識も強くなった。

アウグスティヌスは、自らの思索において悪の原因を探求し、論争においてみずからの教えを深めていった。同時に司教として信徒たちと接することで、悪の現実を目覚めていった。アフリカの民は、喜怒哀楽が激しく、無知蒙昧で、見栄をはった。金持ちも、貧乏人も、肉の欲、目の欲、野心という悪に染まっていた。説教すると反省はするが、繰り返し罪をおかし続ける。貪欲と放逸の悪は、繰り返し説かれた。金持ちは、浪費を魂に良いこととして、必要と神のためでなく、見栄をはり消費する。民衆は、教会より、劇場を好んだ。飽食と酩酊に明け暮れた。アウグスティヌスは、神に向き直ること、施しをすること、心に富を積むことを、繰り返し説いた。

#### 《注》

- (1) 参照、宮谷宣史、アウグスティヌス、89 頁。
- (2) ミラノで回心したのは、キリスト教へであるか新プラトン主義へであるか論争がある。アウグスティヌスが、信仰よりも理性に優位性を求めていたかどうか、論争がおきている。参照、清水正照、アウグスティヌス著作集第 1 巻、総説、505-514 頁。
- (3) 参照、岡野昌雄、アウグスティヌス著作集第 7 巻、解説、308-310 頁。ミラノの回心の 13 年後に書かれた『告白』第 9 巻の伝記的報告と、直後の報告とに差があり、どちらが真実かに関して論争がおきている。ポワシュらは、両方の報告は統一していると主張する。ミラノの回心直後は、信仰よりも理性に優位を認めていた。キリスト教の伝統的教理を受け入れはしたが、プラトンの知恵の一般的適応としか考えていなかった。新プラトン主義としての段階であっ

た。ハルナックやティンメらは、ミラノの回心の時代の関心は、新プラトン主義の哲学であり、『告白』での報告は実際の思想的発展を間違えて虚構したものであるとする。本稿では、『告白』での内容と、ミラノの回心の直後に書かれた「カシキアクム対話篇」の『アカデミア派駁論』、『至福の生』、『秩序』、『ソリロキア（独白）』などは、ほぼ同じ内容であるという一般の説を採る。参照、清水正照、アウグスティヌス著作集第1巻、総説、505-506頁。「聖書を読みはじめた私は、先にプラトンの書物のなかで読んだ真実のことがらはすべて、聖書のうちに、しかもあなたの恩恵を賞賛しつつ述べられていることを発見しました（『告白』七・二一・27）。」の記述をそのまま受け入れる。

- (4) 悪は、マニがいうような実体でなく、善ないし存在の欠如つまり壊敗（corruptio）と解釈する（『マニ教の基礎といわれる書簡を駁す』三五・39）。音声とは音声の存在することであるが、沈黙とは単に音声がないこと、音声の欠如を意味する。世界は光により照らされ明るい、光の非存在として暗さをもつ。それと同じように、悪は実体でなく、本性の欠如つまり壊敗である。マニ教の説くように悪は、闇や肉体のせいではない。悪の原因は、人間の転倒した意志にある。
- (5) 385年のミラノでの乞食との遭遇も、自分の生き方への反省を促した（参照、『告白』六・六・9）。皇帝へ捧げた頌詞が式典で賞賛され、喜びと幸福感に満たされて帰宅する途中に、冗談を言いながらはしゃいでいるみすばらしい乞食と出会った。そのことが、真の喜びへの反省を促したのである。
- (6) アリストテレスや古代ローマのキケロの倫理思想では、浪費は、剛毅、気前の良さと評され、美德に数えられている。参照、富貴島明、消費＝浪費に関する理論の歴史(2)(3)。
- (7) 『告白』では「浪費」という表現でなく、「目の楽しみ」という（『告白』十・三十四・53）。内に自分たちをつくりたもうた神をおきざりにして、自分の外に自分たちのつくったものを追い求める。目の楽しみを求め、神から遠ざかる。生活の必要と信心のための意義をはるかに逸脱したしるもの（さまざまな芸術品や技術品、衣類、靴、器、その他あらゆる種類の工芸品、いろいろな絵画、彫刻、そのほかのもの）を際限なく、美という基準で、目の楽しみのためだけに追い求める。美しいものの罠に足を取られる。哀れな罠にかかった状態、それが浪費・贅沢である。「豊かな欠乏」ともいっている（『告白』一・十二・19）。地上的な富を豊かにもちながら、真の富である神を知ることがないのは、内的空虚である。
- (8) 参照、加藤信朗、アウグスティヌス『告白録』講義、307頁。
- (9) ペラギウスとペラギウス主義に関しては、金子晴勇、アウグスティヌス著作

集第9巻, 総説, 333-346頁と, 金子晴勇, アウグスティヌス著作集第10巻, 総説, 355-372頁と, 金子晴勇, アウグスティヌス著作集第29巻, 解説, 501-538頁と, 金子晴勇, アウグスティヌス著作集第30巻, 解説, 471-517頁と, 金子晴勇, アウグスティヌスとその時代と宮谷宣史, アウグスティヌス, 250-272頁を主に参照した。

- (10) 参照, 宮谷宣史, アウグスティヌス, 266頁。
- (11) 参照, 金子晴勇, アウグスティヌス著作集第10巻, 総説, 365頁。
- (12) 参照, 金子晴勇, アウグスティヌス著作集第10巻, 「聖徒の予定」解説, 400-401頁。
- (13) cf. Adalbert Hamman, *La Vie Quotidienne en Afrique du Nord au Temps de Saint Augustin*. p. 58. 東丸恭子訳, アウグスティヌス時代の日常生活, 上巻 83頁。
- (14) cf. Ibid., p. 71. 訳, 上巻 104頁。
- (15) cf. Ibid., p. 266. 訳, 下巻 129頁。
- (16) cf. Ibid., p. 74. 訳, 上巻 110頁。
- (17) cf. Ibid., pp. 278-279. 訳, 下巻 151-152頁。
- (18) cf. Ibid., p. 79. 訳, 上巻 118頁。
- (19) cf. Ibid., p. 100. 訳, 上巻 153頁。
- (20) cf. Ibid., pp. 183-190. 訳, 上巻 118-123頁。
- (21) cf. Ibid., p. 145. 訳, 上巻 228頁。
- (22) cf. Ibid., p. 132. 訳, 上巻 132頁。
- (23) cf. Ibid., p. 298. 訳, 下巻 188頁。
- (24) cf. Ibid., pp. 343-345. 訳, 下巻 259-263頁。
- (25) cf. Ibid., pp. 146-169. 訳, 上巻 230-269頁。
- (26) cf. Ibid., pp. 321-327. 訳, 下巻 224-234頁。
- (27) cf. Ibid., pp. 327-332. 訳, 下巻 236-244頁。
- (28) cf. Ibid., p. 236. 訳, 下巻 80-82頁。
- (29) Peter Brown, *Augustine of Hippo: A Biography*. 出村和彦訳, アウグスティヌス伝, 下巻 160頁。

#### 参考文献

Angela, Alberto. *Una Giornata nell'antica Roma*. Arnoldo Mondadori Editore S.p.A. 2007. 関口英子訳『古代ローマ人の24時間 よみがえる帝都ローマの庶民生活』河出書房新社, 2010。

アウグスティヌス著作集全 30 巻, 教文館。

Berry, Christopher. *The Idea of Luxury: A Conceptual and Historical Investigation*. Cambridge University Press, 1994.

Brown, Peter. *Augustine of Hippo: A Biography*. Faber and Faber Limited, 2000. 出村和彦訳『アウグスティヌス伝』教文館, 2004。

富貴島明「「消費」＝浪費に関する理論の歴史(1)」『城西大学経済経営紀要』第 15 巻 (1997 年 3 月)。

——「「消費」＝浪費に関する理論の歴史(2)」『城西大学経済経営紀要』第 16 巻 (1998 年 3 月)。

——「「消費」＝浪費に関する理論の歴史(3)」『城西大学経済経営紀要』第 17 巻 (1999 年 3 月)。

——「アウグスティヌスの浪費に関する思想(1)」『城西大学経済経営紀要』第 20 巻 (2002 年 3 月)。

Hamman, Adalbert. *La Vie Quotidienne en Afrique du Nord au Temps de Saint Augustin*. Hachette, 1979. 東丸恭子訳『アウグスティヌス時代の日常生活』リトン, 2001。

長谷川宜之『ローマ帝国とアウグスティヌス 古代末期北アフリカ社会の司教』東北大学出版会, 2009。

服部英次郎『アウグスティヌス』勁草書房, 2011。

金子晴勇『アウグスティヌスとその時代』知泉書館, 2004。

加藤信朗『アウグスティヌス『告白録』講義』知泉書館, 2006。

宮谷宣史『アウグスティヌス』講談社, 2004。

茂泉昭男『アウグスティヌス研究 徳・人間・教育』教文館, 1987。

——『輝ける悪徳 アウグスティヌスの深層心理』教文館, 1998。

山田晶『アウグスティヌス講話』講談社, 2012。